様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７６１

研究課題名（和文）近代日本軍隊の食とその国民生活への影響に関する研究

研究課題名（英文）The influence that the armed forces gave in the meal of the nation : focusing on modern Japan

研究代表者
一ノ瀬　俊也（ICHINOSE, Toshiya）

埼玉大学・人文社会科学研究科（系）・准教授

研究者番号：８０３１１１３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、当初近代日本の軍隊における「食」のあり方が一般社会にどのような影響を与えてきたのか、という観点から史料の収集と分析を行った。第2・第3年度では、研究課題を若干拡大して、近代日本における「食」のみならず海軍、軍艦にまつわる諸言説が戦前戦後の日本社会の戦争観、軍隊観をいかに規定したかという問題についての研究も行った。研究成果としては、軍医団雑誌などに掲載された食・栄養関係の記事目録を作成した。また、2冊の図書『戦艦大和講義』『戦艦武蔵』を刊行した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I analyzed how“meal”in the modern Japanese armed forces influenced the general public by the collection and analyze the historical materials. In the last year, I expanded some research themes, and analyzed how the explanation in the navy concerning the warship changed the view about the war and armed force of the modern and postwar Japan. As results of research, I made the article list of a meal, nourishment relations placed in the army surgeon corps magazines. In addition, I have published two books, “Battleship Yamato Lectures” and “Battleship Musashi”.

研究分野：日本近現代史

キーワード：軍隊　食文化　海軍　戦争観　戦艦

１．研究開始当初の背景

近代日本の食が前近代の伝統的なものから漸次欧風化して現在に至った過程については、これまで主に家政学系の研究者が分析を行い、いくつかの成果も得られている（江原絢子他『日本食物史』吉川弘文館、2009 年など）。

しかし、戦前日本の国家総動員体制、総力戦体制の構築に際して国民の身体が食の改善を通じていかに作り替えられようとしたか、各権力主体の中でも近代化推進の強力な主体であった軍がそこでいかなる役割を果たしたのか、といった、いわば政治史・軍事史的な検証や考察は、残念ながら必ずしも十分なものではなかった。

これまで、そのような政治史的視角に立って、軍による食を通じた国民の身体改善政策に言及した研究は、外国人の日本研究者による栄養と戦争の関係についての問題提起的な論文(カタジーナ・チフィエルトカ「食の近代化と軍隊食」『季刊ヴェスタ』27、1997 年)などを除き、けっして十分な蓄積を有するとは言い難い。

以上のような研究状況を踏まえ、明治～昭和戦前期の軍隊食を社会史・民衆生活史の視点から通時的・実証的に分析することが求められている。さらに、軍が兵食として米食や西洋食を供給したことが国民の軍隊観・戦争観をいかに規定していったか（軍隊に行けば米の飯が食える、軍隊で肉の味を覚えた、といった言説は、しばしば見かけられる）も、興味深い問題と言える。

一方、近年の近代日本軍事史研究でも、「軍隊と社会」の関係史的視点が導入される中で、欧風の軍隊食が国民の嗜好を徐々に変えていったことについても注目されるようになってきた（吉田裕『日本の軍隊』岩波新書、2002 年）。

しかし、近世以来の伝統的な食文化・生活習慣に対する、〈近代〉からの挑戦とも言うべき軍の施策に対する国民の積極的・消極的な抵抗（たとえばパン食は脚気・腐敗予防の観点から軍が強く推進したにもかかわらず、戦前日本では必ずしも普及しなかった）、これを受けた軍の新たな対応策については通時的・実証的な検証がなされているとは言い難い状況である。

２．研究の目的

本研究は、近代日本人の食生活に軍隊の食事が与えた影響を解明することで、食の欧風化・近代化がどのように進行し、現在の我々の生活を規定しているのかを再検討するのが目的である。

明治以降の食の近代化にあたり、日本軍隊が導入した洋風の食事、たとえばカレーライスや各種の揚げ物類などが日本人の食生活の変化・欧風化に一定の影響を及ぼしたこと、軍が優良な兵力獲得の観点から国民の栄養改善に注力し、パン食の普及をはじめとする各種の宣伝活動を行ったことについては、先行研究でも指摘されている。

しかし、単純に軍隊が洋食を導入したから社会の食も洋風化したとみるのは正確な歴史理解とは思えない。

なぜなら、そこにはさまざまな時間差・地域差、そして近世以来の伝統的な食生活が上から否定されることへの心的抵抗があったことが予想されるからである。

そこで、食に関する軍の動向と社会の反応をそれぞれの視点から実証的に検証することで、食という人間活動の最も根本的部分への理解を歴史的側面から深めてみたい。

また、最終年度においては、近代日本における食のみならず海軍、軍艦にまつわる諸言説が戦前戦後の日本社会の戦争観、軍隊観をいかに規定したかという問題についての研究を行う。

３．研究の方法

本研究は、戦前の軍と食に関する諸史料を体系的に収集して分析し、日本人の食生活に与えた影響を解明するものである。そのため、具体的には、雑誌『糧友』や『軍医団雑誌』『食養研究』などの軍もしくは軍人の刊行物、食糧に関する軍隊教科書などから得たデータを明治～昭和戦前期まで時系列順に配列し、考察する。

さらに、こうした上からの施策に対する兵士や国民の反応を検証すべく、主計将校や兵士たちなどの回想録も収集して、多様な視点からの研究を行う。以上の作業を通じて、軍と兵士・国民の双方向的な関係性の中からいかに現在の日本人の食生活が形成されていったのかを解明する。

研究の第 2・第 3 年度においては、視野を食の問題のみならず、戦後の一般社会における戦争観・軍隊観にまで広げ、具体的に次の 2 つの課題を設定して研究を行う。

まず戦争中の海軍がいかなる論理で軍拡、艦隊の増勢を国民に訴えかけたか、という問題である。そのため、戦前、なかでも 1930～40 年代にかけての海軍が発行した一般国民向け宣伝パンフレットを収集、内容分析を行う。

ついで、敗戦後から現在に至るまで、日本社会における戦争像を戦艦や海戦に関する映画や小説、マンガなどの中から探る。とくに戦艦武蔵に注目し、吉村昭『戦艦武蔵』や佐藤太郎『戦艦武蔵の最後』、渡辺清『海の城』、戦友会の発行した記念誌『嗚呼戦艦武蔵』『続!!　嗚呼戦艦武蔵』などにおいて、武蔵とその戦いに戦後の日本社会でいかなる意味づけがなされてきたのかを、2015 年、いわゆる戦後 70 年と武蔵の船体発見に際して公刊された種々の武蔵関係図書との内容比較を行いながら考察し、戦後日本人の戦争観がいかに変容していったのか、その過程と

背景を問う。

４．研究成果

平成 25 年度は、研究の初年度として、近代日本の軍隊と食の問題を検討する上での基礎となる各種資料の収集を行った。糧友会発行の雑誌『糧友』をはじめとする啓蒙雑誌、川島四郎『食糧研究余話』や海軍経理学校、陸軍経理学校の同窓会誌など元軍人たちの回想録、『軍隊調理法』などのマニュアル類などである。

関連史料については、昭和戦中期のものにとどまらず、明治・大正期に刊行された文献・軍隊内刊行物などについても、積極的に収集・調査分析を行った。

また、軍隊における食・栄養と密接に関連する、医療・医学の問題についても視野を広げるべく、雑誌『軍医団記事』より関連記事をピックアップして論文リストを作成した。

25 年度はこれら研究上の基盤となる文献リストを作成したのであるが、これだけ充実したリストは現在のところ作られていないと思われる。本報告書執筆までに具体的な掲載誌が決定したものではないが、現在関連する学術論文を執筆中である。

また、初年度の研究で得た歴史学的知見を生かし、著書『日本軍と日本兵』（講談社現代新書）における、第二次大戦時にアメリカ軍のみた日本軍兵士の食・医療状態に関する記述を日本側の諸史料から裏付け、考察を充実させることができた。

平成 26 年度は、近代日本の軍隊と食に関する史料を収集、分析を継続するとともに、問題関心を日本社会の戦争観、軍隊観全体にまで広げ、戦前戦後の海軍にまつわる諸言説が一般社会の戦争観をいかに規定したかという問題についての研究を行った。

まず戦争中の海軍がいかなる論理で軍拡、艦隊の増勢を国民に訴えかけたか、という問題を解明するために戦前の海軍が発行した一般国民向け宣伝パンフレットなどの刊行物を収集、考察した。その結果、大正期の軍縮による予算・人員削減のトラウマを抱える海軍が、組織防衛のため納税者たる国民に積極的に軍備拡張への理解を訴えかけていたことが理解できた。

また、敗戦後から現在に至るまでの日本社会において、戦争がいかに表象されたのかを、戦艦や海戦、中でも今日の日本国民の間にいまだ高い知名度を持つ戦艦大和を事例に選び、戦後日本における大衆文化の展開の中で多数創られた大和を題材とした映画や小説、戦記マンガなどの中から探った。

この研究の成果である論文「戦艦大和　戦後作られた最強神話」は、吉田満の『戦艦大和ノ最期』などにみられるように、戦死者を「新生日本」のための犠牲であったと位置づけることで、戦争が起こって多くの犠牲者が出た背景がわかりづらくなっているのではないか、との問題提起を行った。本論文は、『朝日新聞』（2014 年 8 月 28 日朝刊「（担当記者が選ぶ注目の論点）終戦 69 年を振り返る」にて紹介され、一定の社会的評価を得た。

また、続いて同様のテーマを扱った著書を『戦艦大和講義』と題して刊行した。前掲の論文「戦艦大和　戦後作られた最強神話」の論旨に大幅な加筆・補足説明を加え、大和が建造されてから沈没に至るまでの経緯・時代背景についても考察を加えたものである。

同書は『朝日新聞』、『東京新聞』、『京都新聞』2015 年 6 月 7 日朝刊読書面、『毎日新聞』6 月 9 日付夕刊インタビューにてそれぞれ内容を紹介されるなど、一定の社会的反響を呼び、本研究の成果を広く社会に還元することができた。

平成 27 年度は、研究の最終年度として、近代日本の軍隊と食に関する史料を収集、分析を継続するとともに、前年度に考察した戦艦大和といわば対になる存在であった姉妹艦の武蔵に関する回想録や戦友会誌などの諸史料や言説を収集し、国民の戦争・軍隊観の変容についての考察を行った。

前年度からの研究成果を、戦争社会学研究会で「問題提起　戦争と展示～大和ミュージアムをめぐって」と題して報告した。この報告は、近年盛んになっている歴史系博物館の戦争関連展示において、いかなる歴史表象が行われており、その課題は何なのかを考察、問題提起を試みたのである。

その具体的な問題点として、戦争・軍備が現代日本の技術的基盤としてのみ表象されており、戦争の起こった歴史的背景などが捨象され、観覧者がこれを考える契機を持ち得ていないのではないか、といった点を指摘した。

これに関連して戦艦武蔵に関する戦時中の公的な記録や回想録、戦後大衆文化の中で多数執筆された小説や映画とそのシナリオ、軍事・ミリタリー文化雑誌の記事、戦友会史などにみられる戦争に関する言説を収集して分析した結果、戦前・戦後日本人の戦争観とその特質について、以下のような諸知見を得るに至った。

①戦争には死を美化・正当化する諸々の「ファンタジー」がつきものであり、戦時中の人々はそれがあってはじめて死地へと赴いた。

②戦争を考える上で真実・事実の追究は確かに大事だが、我々がそうでないと見なしたものを切り捨てると、我々の歴史や人間の理解がとたんに貧しくなる。

③多くの人にとって昔の人々の苦難は所詮人ごとでしかなく、いわゆる〈戦争体験の継承〉などはとうに破綻している。

などといったものである。

これらの研究成果は、著書『戦艦武蔵　失われた巨艦の航跡』と題して中央公論新社より 2016 年 7 月 20 日に刊行予定である(現在製版・校正中)。

以上の海軍・軍艦表象についての分析とは別に、近代日本で書かれた軍事郵便がいかなる制度的枠組みのもとで国内外を往復していたのか、その制度は明治から昭和にかけてどのように変化していったのかについても、論文「軍事郵便」にて分析を加え、概観した。軍事郵便に関連する諸資料の複写・収集を、本研究費を用いて行った。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

(1)一ノ瀬俊也「戦艦大和　戦後作られた最強神話」、文藝春秋、査読無、92(11)、2014年、266-275

〔学会発表〕（計１件）

(1)一ノ瀬俊也、「問題提起　戦争と展示～大和ミュージアムをめぐって」、戦争社会学研究会大会、2015 年 4 月 12 日、東海大学高輪キャンパス

〔図書〕（計５件）

(1)一ノ瀬俊也、中央公論新社、『戦艦武蔵 失われた巨艦の航跡』、2016、頁数未定

(2)一ノ瀬俊也「軍事郵便」、荒川章二ほか編『地域のなかの軍隊 8　基礎知識編 日本の軍隊を知る』吉川弘文館、2015、152-168

(3)一ノ瀬俊也『戦艦大和講義 私たちにとって太平洋戦争とは何か』人文書院、2015、329

(4)一ノ瀬俊也、講談社、『日本軍と日本兵』、2014、272

(5)一ノ瀬俊也「「歴史学と社会学の交差」についての偶感 ―『戦争社会学ブックガイド』をめぐって」、福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編『戦争社会学の構想』勉誠出版、2013年、301-314

６．研究組織

(1)研究代表者

一ノ瀬　俊也（ICHINOSE,Toshiya）

埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：８０３１１１３２

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）